

関学の香り　　―泥かぶる人生―

舟　　木　　　　　讓

華やかな表舞台で多くの人に認められ活躍することや、富や権力を手中にし、それらを自由に行使する人生は多くの人を魅了するかもしれません。そしてそれに向かって全身全霊を傾けて努力することは尊いことです。

しかし「そうしたことだけ」が目的になったとき、人は「的外れ」な人生を送ることになると思われます。私たちが周りを丁寧に見渡せば、その存在が真に有難いものと感じられる人は、誰しもが嫌がる他人の失敗の後始末や、自分の時間が無為に消えてしまう誰しもが厭う事態を引き受ける人であり、また自らのつとめに黙々とただただ誠実に関わる人であることに気づかされます。

関学が創立以来大切にしてきたのはそのように、自らの人生や仕事あるいは自らが関わった人たちへの「無償の誠実さ」であり、それ故にその歩みの中で独自の香りを立ち上げています。その香りは、それに触れた人誰しもがほっとする、あるいはいなくなって初めてわかる人から立ち上るものだと言えます。そしてその源泉は、何よりもキリスト教の原点であるイエスの存在にあります。なぜならイエスの存在の本当の意味と本質は、十字架で亡くなってからよりいっそう立ち香り、多くの人の希望と慰めそして力となってきたのですから。

(大学宗教主事)

「建学の精神」にみる「関学らしさ」 ―スクールモットーを軸に―

井　上　琢　智

関西学院の「建学の精神」は、と尋ねられて“Mastery for Service”と答える人は少なくありません。それほどこのことばは関西学院につらなる人びとにとっては「キリスト教主義」という「建学の精神」を示すものとして現在の私たちに浸透しています。ところで、皆さんは次のことばがどの学校の建学の精神なりスクール・

モットーなのわかりますか。「独立自尊」、「学問の独立」、「自由と清新」・「平和と民主主義」、「正義と自由」、「自由と進歩」、「個人の自由の尊重と実証的・合理主義の学風」、「権利自由」・「独立自治」、「キリスト教精神に基づく『良心』」、「キリスト教に基づく人間教育」、「キリスト教信仰にもとづく人間教育」、「キリスト教精神を基底とし、真実と価値を求めて、人間形成」、「神と人々とに奉仕する」、「国家の須要に^{うんのう}応ずる学術技芸を教授し及其蘊奥を攻究するを以て目的とす」などです。平和、自由、正義、権利、権力、国家などの政治学上の用語や、人間、真実、価値、進歩など哲学上の用語が多用される一方、キリスト教、神、信仰など、宗教上の用語も用いられています。あなたは、これらから「関学らしさ」をどのように発見されますか。ともに考えてみませんか。

(学長)

仕える

日 浦 直 美

“I give five dollars and myself”（「私は、この5ドルと私自身を献げます」）。これは、関西学院の創設者、W.R.ランバスの母、メアリー・イザベラ・ランバスが、10代の若き日に、中国での宣教のアピールがなされた集会で発したと伝えられている言葉です。建学の精神を想う時、創設者W.R.ランバスと彼を支えたランバス・ファミリーの生き方の根底に、神と人に「仕える」という共通の精神があることに気づかされます。私達は何のために生き、生かされているのでしょうか。「私自身を捧げます」という少女メアリーの言葉は、自分の生活のためだけに学び、働くこと以外の人生があることを教えてください。「知識を求めるのは、単に知識のために求めるのではなく、まして名誉のためではなくて、人類に対してより良き務めをなすことができるものとして、自らに備えんがため、これをなすような者でなければならない。」「主であれ、人であれ、而して仕えるために」という第4代院長、C.J.L.ベーツの言葉と共に、学院創設時の建学の精神を改めて心に刻みたいと思います。

(教育学部長)